

〈投稿論文〉

〈産まない〉女に夜明けは来ないのか？
——『真夜中の祈り』を通して見る作家の戦略——

洲崎 圭子

Rosario Castellanos' *The Book of Lamentations* (1962) is highly regarded as an "indigenista" novel. Indigenista novels depict the realities of indigenous peoples' lives and attempt to recover their voices and rights. Set in post-revolutionary Chiapas, Mexico in the late 1930s, the novel captures the power relations and conflicts between the Ladino landowners and indigenous insurgents spurred by agrarian land reform. However, the novel goes beyond the indigenista genre, centering on two characters' separate struggles to find their place in society: an indigenous sterile woman who desires to have a child, and an educated common-law wife who refuses to have a baby. Focusing on the expected roles of women, and in particular the role of childbirth, in this study I would like to reassess *The Book of Lamentations*, viewing it not exclusively as an indigenista novel, but also as a work about and for women, both indigenous and Ladino, who seek to answer what it means to be a Mexican citizen, revealing their indignation against a society that has long marginalized Ladino women and doubly marginalized indigenous women.

キーワード：産む／産まない、近代国家、出産機械、母性、家族

はじめに

「夜明けにはまだまだ時間がかかっていた」と終結する長編小説『真夜中の祈り』 *Oficio de tinieblas* (1962) は、メキシコの先住民蜂起をテーマに扱っている。作者は、メキシコの女性作家ロサリオ・カステリャノス (Rosario Castellanos, 1925-1974)。チアパスの大農園主の長女として生まれ、詩人として文筆活動をスタート、最終的には在イスラエル・メキシコ大使として滞在中にテルアビブで事故死した。

二作目の長編にあたる『真夜中の祈り』は、三つの時間軸をもとにしている。チアパス地方で実際に起こった先住民蜂起事件をもとにしているため、登場人物の何人かは実在の人物がモデルとなり、土地譲渡を渋る白人農園主たちに対する先住民たちの反乱の様子とその失敗のさまが描かれる。19世紀に実際に起きた事件を、ラサロ・カルデナスLázaro Cárdenas大統領の統治期 (1934-1940在任) に移しかえたとは、作家自身が説明している¹ ことであり、背景となる時代としては、1910年に勃発したメキシコ

革命が終結し大土地所有制度が本格的に解体された1930年代である。執筆された1960年前後は、1959年のキューバ革命成功の余波を受け、メキシコにあっても経済が発展し活気に満ちていた時期でもあり、若者や新興中産階級の人々が、新しい時代の息吹を実感として享受しはじめたころであるともいえる。『真夜中の祈り』は、近代的な国民国家として立ち上がろうと模索していた時期に書かれたということで、ジーン・フランコ (Jean Franco) は、同時代の他の作家の作品とともに、近代国家形成時の「建国の物語」としての価値を評価 (Franco 1989, p. 146) する。

カステリャノスの父は、チアパスで大農園を経営していたが、カルデナス大統領の政策により土地を追われる形で一家はメキシコシティに移住した。国立メキシコ自治大学に入学したカステリャノスは、女子学生がまだ極端に少なかった時期の1950年、女性と芸術活動のかかわりについて論じた修士論文『女性の文化について』 *Sobre cultura femenina* を提出した。そこには、新しい時代に向けて物書きとして出発しようとする若者のひとつの矜持が現れていた。しかしカステリャノスは、「女性の文化は存在しない」と結論づけた。つまり、女には<産む>という大きな作業があるため、芸術作品を<産む>必要はなく、それゆえ男だけが文化的活動に携わってきた／独占してきたというのである。その7年後、自伝的色彩の濃い第一小説『バルン・カナン』 *Balún Canán*² (1957) の出版直前には、もうすでに第二の長編小説の構想を練り始めていたと作家は語っている。二作の長編小説には、さまざまな階級・人種に属する女性が数多く登場する。『バルン・カナン』における、中絶した独身女性や、跡取りを<産む>ことにこだわった妻についてはすでに考察 (洲崎 2012) した。ここでは、先住民擁護主義文学に新風を吹き込んだと高い評価を受けた『真夜中の祈り』から、<産まない>二人の女性を取り上げることとする。

『真夜中の祈り』の主人公カタリーナは、子を産むことがない。彼女の「クルミのように閉じた腹」(13)³は、不妊という問題を抱えていたためである。先住民社会では、子を産めないことは<死>にも値する。カタリーナは思い悩んだ末、巫女となって術を使いこなすようになり、ついには村人の尊敬を集めはじめた。村人たちが蜂起した際カタリーナは、慈しんで育てたはずの10歳の養子ドミンゴを<神>と見立て、磔にして抹殺する。物語にはもう一人、<産まない>女が登場する。土地譲渡を巡る争いの解決を図るため中央政府から派遣された役人の妻、フリアである。フリアは都会で大学教育も受け、自由を謳歌していた。事実婚を貫き、自らの意思で子どもを産むことも拒否し、夫の赴任先のチアパスでは、地元の有力者と不倫関係を持つ危険まで冒して男社会への参入を試みる。カタリーナと併せ、これら二人の<産まない>女が中心に据えられることで読者は、女の物書きの憤りの刹那を垣間見ることになる。本稿では、カステリャノスが修士論文を執筆した時点から問い続けることになった、<産む>ということについて、その後のいくつかの作品やインタビューなどから作家の考え方を確認した後、<産む>ことと国家政策との関係性に焦点化することで、メキシコの一地方の問題を取り扱ったと考えられてきた作品を、<産まない>女に関する物語として再読する。

1. 急がれた近代国家の形成

メキシコでは革命後、近代的な国民国家づくりが急がれた。教育の普及に重点が置かれた結果、1921年に憲法が改正されて公教育省が設立され、初代大臣となったホセ・バスコンセロス (José Vasconcelos) は、教育を通じてメキシコを近代的国民国家へと導こうとした。中央集権的な教育制度

の実現のためにさまざまな取り組みが実施されたが、その過程において、女子教育もまた教育の近代化の柱として位置づけられた。その一環として、チリの詩人でのちにラテンアメリカ圏で初のノーベル文学賞を受賞⁴することになるガブリエラ・ミストラル (Gabriela Mistral, 1889-1957) をメキシコに招へい (1922-1924在住) した。ミストラルの名を冠した家庭学校のために編纂された『女性のための読本』*Lecturas para Mujeres* (1923) においては、女性の居場所は家庭にあるとして母性が絶賛され、女性の存在理由は、物質的、精神的両面における母性にこそあるとされた。この考え方は、近代化を目指していた当時のメキシコ国家の考える愛国心と結びつけられ、これによって「母親として国民を産むことにより国家に結ばれるという近代国家による家族、ジェンダーへの囲い込み」(松久 2012, p. 207) がなされたと、公教育とジェンダーについて分析した著書『メキシコ近代公教育におけるジェンダー・ポリティクス』のなかで松久玲子は指摘している。

このような1920年代を経て、『真夜中の祈り』が背景としている1930年代から40年代にかけては、近代国家の本格的形成にあたり、カルデナス大統領がさまざまに改革を断行した時期でもあった。大土地所有制度の完全解体や鉄道の国有化、石油産業の国有化といった重点施策が次々に実施された。その過程における大衆動員のポピュリズム的手法は「女性にも適用された」(松久編 2002, p. 199)。その結果が、同大統領の任期末期の1938年の憲法34条改正案可決につながり、女性にも参政権が付与されることとなったわけである (しかしながらこの法律は、1953年になるまで施行されなかった)。当時、女性は一家の母すなわち家庭内のイデオロギー再生産の鍵を握る存在として、当局は家庭から社会的・教育的に新しい概念を植え付けようともくろんでいた。そのカルデナス大統領期にあたる1936年には、「一般人口法」も公布された。ここでは、国の人口政策発展のために必要な移民措置、人口増加の方策などととも、結婚奨励が堂々と謳われている。また、同年に発表された「保健衛生局が幼児のために表明した原則」の前文および項目1において女性は「健全かつ優良な人口の育成に貢献する義務がある」(松久 2012, p. 234) として、すべての女性に「産む」義務が課された時代でもあった。

2. 制度としての母性

今年3月に他界したアドリエヌ・リッチ (Adrienne Rich, 1929-2012) は1970年代、第二波フェミニズムの興隆の最中に、エッセイ集『女から生まれる』*Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution* (1976) において、「生命を産む女の能力にたいして、男は昔から、絶えることなく、羨望と畏敬と怖れを抱いていて、それは女のそのほかの一切の創作力にたいする憎悪というかたちを繰り返しかえしとってきた」(リッチ 1976=1990, p. 55) と断言した。さらにリッチは、<母性>には二つの意味合いがあるとしている。一つは、女が子どもを産む潜在能力、もうひとつはその潜在能力を男の管理下/支配下におくための制度としてのそれである。「母性のある特定の子供あるいは子供たちとの強い相互関係だととらえる場合、それは女性が生きる過程のほんの一部でしかない。一生を通じて女を定義づけるものではない」(リッチ 1976=1990, p. 51) とリッチは言い、「人間社会の基盤として受け止められている」(リッチ 1976=1990, p. 54) として、母性という制度そのものに問いを投げかけた。つまり、女は産み、産んだあとも当然子を慈しまなければならない、といった考え方を所与のものとして押しつけることで、再生産活動を促す仕組みとして母性が制度化されていたということを確認したのである。

最後となったエッセイ集『ラテン語を知る女』*Mujer que sabe latín* (1973) のなかで、「公教育に対

するメキシコ人女性の参画”“La participación de la mujer mexicana en la educación formal”というエッセイにおいてカステリャノスは、メキシコにおける女性の置かれた立場を概観し「女が学を身につけることは国家にとって悪い投資であるという偏見」(Castellanos 1973, p. 30)がまだ存在しており、昔から、独身女性は子を産む<女>ではないとして周縁化され、「妻や母となる栄光は何にもまして好まれ続けている」(Castellanos 1973, p. 30)とあらためて指摘したうえで、これまでの伝統的価値観を打破して、女性たちが持つ各々の才能を開花させるべきであるということを正面から論じている。そのなかでは母性についても言及があり、「母性とは、まったくもって神聖化のための手段などではない。統制可能な現象である」(Castellanos 1973, p. 40)として、母になることだけにとられる必要はまったくないことを強調した。このエッセイと比較すると、カステリャノスが作家としてスタートする直前に執筆した修士論文『女性の文化について』では、母性について何度か言及があるものの、男性は女性が保持する「母性に対して妬ましく思」(Castellanos [1950] 2005, p. 185)っているという記述などにおける<母性>という言葉は、単に子を産むこと自体を指して使用しており、リッチが分類したような制度としての母性と、潜在能力としてのそれとの二種があることを認識して論じているわけではない様子が見て取れる。しかしながらそこでは、長い間ミステリーにつつまれており実態が明らかではなかったので、男たちは母性というものに対し、「醜悪」(Castellanos [1950] 2005, p. 190)で何か奇妙なものと感じており、その「醜悪」を退けようとした男たちのよりどころが「文化」活動であったとした。そのため、自分たちの領域から女を排除し、産むだけの役割にとどめておこうとする意思が働いた結果が、<母性>に「永遠性を授けて神話化し賛美することにつながった」(Castellanos [1950] 2005, p. 192)と記述している。ここでカステリャノスは、20年余り時代を遡るということもあり、リッチほど精緻ではないものの、制度として押しつけられる<母性>について模索し、自らの立ち位置を定めようと試みていたということが判明する。このカステリャノスの修士論文が、どのようなものであったかをもう少し見てみたい。

3. 物書きとしての宣言

この修士論文『女性の文化について』は1950年、国立メキシコ自治大学の哲文学科に提出された。もともとカステリャノスの両親は、女であるということで娘ロサリオの教育には無関心だった。彼女の大学院修了年にあたる1950年ごろには、メキシコ全土で読み書きができた女性は53%に過ぎず、大学教育の恩恵を受けていた女子はたった5,507人であった(松久編 2002, p. 261)という統計がある。両親が大学在学中に相次いで亡くなり、自由の身となった結果、哲学は自分には「近寄りたくない」(Castellanos 1973, p. 205)と感じていたカステリャノスは一大決心をし、「自身をプロとして、文学に捧げ」⁵るべく、専攻を変更した。その決意表明としての修士論文であるわけだが、「女性の文化はあり得るのか?」という自ら立てた疑問に対し、「存在しない」と否定的な裁断を下している。理由としては、女は、本を書き真実を探求する代わりに子どもを<産む>という大仕事があるため、文化活動に力配分することが物理的に不可能であるからだと説明する。女は芸術作品を創造する必要はなく、結果として女性が文化・芸術分野に進出することもなかった。修士論文のなかでカステリャノスが、女が<創造する>/<産む>という問題について正面から取り組んだことは、すでに考察した(洲崎 2008)。カステリャノスはその修士論文において、ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)や、古代ギリシャの女性詩人サッフォー(Sappho)の活動を取り上げることで、「母性から疎外された女性の創造的活動の結実に出

会えるのは文学の中において」(Castellanos [1950] 2005, p. 206) であると考察し、なおかつカリブ海地方においては女性たちが自ら使用する言語を編み出しているという例を引き、女性たち自身は、「独自のスタイルを持つことが待たれている」(Castellanos [1950] 2005, p. 208) として、女性が創作活動に参加することの可能性を探った。

ところで、1957年に出版された第一小説『バルン・カナン』は、多分に自伝的であるとされている。語り手である7歳の女兒は最後まで名前でも呼ばれることがない。物語において名付けられないということはすなわち、かけがえのなさを誰からも認めてはもらえず価値の薄い存在であるということを示している。このことは、弟のみを気にかける母親からはまったくかえりみられないということを補強することとなり、女兒の疎外感はいっそう増す結果となる。物語中、先住民の乳母が、農園の跡取りである女兒の弟の死を予言したとき母親である農園主の妻の、神の罰が下りる先としては、息子だけは避けてほしいと強く望んだその切実さは、「男の子はだめです！」⁶という叫びとなって露見する。跡取りである弟のことしか考えず、女兒のことは全く念頭に置かずに言い放った農園主の妻のセリフは、自身が幼いころ、台所でたまたま聞かされた実母のセリフそのものであると、他界する前年に行われたインタビュー⁷であるにも関わらずカステリャノスは、まるでつい最近起こった出来事であるかのように語っている。カステリャノスのいところが、たまたま作家の弟の死を予言したところ、そのことを聞いた自身の母親が口にした実際の言葉そのものを綴ったものであると説明しているのである。同じインタビューでカステリャノスは、母親ががんで亡くなる直前、痛み止めのモルヒネを打って意識朦朧としながらも、父が床につくのを見届けてからでないと眠りにつかなかったと語る。徹底的に自己犠牲を払い続ける典型的なメキシコの〈母親像〉を目の当たりにし、女性の置かれた状況が「あまりにもひどいので、結婚したいとは思わなかった」⁸ほどであったとも言言葉を接ぐ。女とは、跡継ぎにはなれず価値のない存在であること、あるいは結婚しても自己犠牲を強いられる存在であるということを痛感していた少女は、長じて物書きとなった。

1967年、カステリャノスは、その年にメキシコで最も輝いていた女性を称賛する賞であるメキシコ女性大賞を受賞した。その際、作家・ジャーナリストのベアトリス・エスペホ (Beatriz Espejo) が行ったインタビューにおいて、愛とは何かということについて尋ねられた際、自らの幼少時の思い出を語っているが、ここにおいても、逆境に弱かった父と、跡取り息子を失くしたことを嘆き続けた母とに挟まれ、自身を生ける屍のように感じていたと語る。それゆえ「ものを書くことではじめて、世界への扉が開かれた」(Espejo 1975, p. 23) として、自身の転機を振り返る。カステリャノスが〈母性〉について綴るとき、幼いころに感じた自身の疎外感や、母親に対する嫌悪感がベースとなり、畢竟、〈母性〉に対しても客観的に距離を置いて見ようとするスタンスを取るのとは当然のことであると考えられる。

さて、カステリャノスがこのように、〈創造する〉／〈産む〉ことにこだわったことは、実際の彼女の小説作品において、いかに展開されたであろうか。『真夜中の祈り』においては、〈創造しない〉／〈産まない〉女が二人登場する。それら産まない女たちがどのように描写されているかを見て行くこととする。

4. 不妊であるがゆえの疎外感

ここで少し、『真夜中の祈り』の先行研究について概括しておく。第一小説『バルン・カナン』、短編

小説集『シウダード・リアル』 *Ciudad Real* (1960) とともに『真夜中の祈り』は、グアテマラと国境を接するメキシコ南部チアパス地方を舞台として先住民が登場するため、「一連のチアパスもの」(Sommers 1964, p. 246) としてジョセフ・ソマーズ (Joseph Sommers) は位置づける。先住民一人ひとりが具体的な性格を備えた人物として造形がなされているため、従来型の先住民擁護主義小説とは違う新しいタイプのそれであると高く評価した。『バルン・カナン』が出版早々チアパス文学賞を受け、英語やドイツ語にも翻訳されたため、二作目の長編『真夜中の祈り』も出版当初から早速に注目を浴び、いくつかの雑誌の書評⁹に取り上げられている。ところが、いずれも歴史的状況を取り扱った力作であるとしているものの、主人公が女性であるといったことへの言及は特にない。<第二波フェミニズム>の到来を見た1970年以降には、先住民の立ち位置と女性のそれとを同一視するフェミニズム批評的アプローチの分析もされており、女性登場人物の各々の描写のされ方を取り上げたものも散見されるが、<産まない>/<産めない>といった再生産活動と関連づけて、当時の社会状況もしくは国家政策に着目したものはない。

主人公カタリーナ¹⁰は、リッチが言うところの<石女>であり、「男の地位を高める息子を産むことができないため退けられる女」(リッチ 1976=1990, p. 113) である。女社会のなかにあっても、「冷たい子宮を持つものとして、女たちのからかい的」(32) で、「悪い女」でありかつ「刻印されていた」(224)。それゆえカタリーナは「昼も夜もずっと一人だった」(188)。カタリーナの不妊については、「この欠如」(32) と端的な指摘があることから明らかなように、先住民社会にあっては一人前の人間とは認められていない。カタリーナは孤独感に苛まれ自分を見失っていく。彼女の心情が綴られる部分は次のとおりである。

カタリーナは子をなさない腰をさわって自らの足取りの軽さを呪い、突然後ろを振り返っては足跡が残っていないことに気が付いた。自分の名前も同じように、部族の記憶に何も残らないのではないかと思い悩み、それからは心が休まることはなかった。(12)

夫ペドロとは、カタリーナが20歳のときに結婚し、当初は円満だった。ところが、先住民社会で子を<産めない>ということは、即離縁の理由となって当然のものであった。しかし、ペドロは離縁の話を持ち出さない。村で裁判官としての仕事を担うようになってからは家を空けることも増え遅く帰宅することもあったものの、「カタリーナを起こさないよう慎重に、ペドロは行動した」(33) と記述があるように、夫は妻のことを常に気遣う様子がうかがわれる。しかしながら、ペドロはもともと口数が少なく、さらには忙しさもあって夫婦間の意思疎通がなくなってしまったという状況のなか、妻は一人で思い詰めた結果、離縁を恐れる気持ちが高じて見放されてしまったと思ひ込むようになる。

そんなカタリーナは、物語中、巫女/呪術師としての役割を担うようになる。自身の不妊を解決するため、巡礼の旅に出るなどしているうちに、神のお告げを聞き、村人たちの尊敬を集めるようになった。村人の<母>となる点については、子を産むかわりに「村に跡を残したいというカタリーナの欲望」(Guerra 1995, p. 190) を反映したものであるとルシア・ゲーラ (Lucía Guerra) は分析している。「心が休まること」のないカタリーナは、白人農園主に暴行を受けた先住民女性マルセラに生まれた子をドミンゴと名付けて引き取り、食べることに事欠く貧しさのなかで、自分は食べたふりを装ってまでわが子の皿には食糧を盛る。ドミンゴの<母>として<わが子>とかわる日常生活を積み重ねるこ

とで、子を慈しむ感情が育っていく様子がていねいに綴られる。

ところがその〈わが子〉は、10歳ともなれば男社会の見習いとして、父ベドロに連れられて、あちこちの男の会合に出席するようになる。カタリーナは、徐々に息子が自分の手を離れていく寂しさから、一時は巫女として術を使えなくなった。そのため、村人の信頼までも失ってしまうこととなり、村の〈母〉としての地位も風前の灯であった。

結末を急ぐ前にもう少しここで、カステリャノスの、〈産む〉ということについての考え方を別の作品のなかで確認してみたい。当時、産むことで女は、女として存在することを初めて許され、その地位を獲得するとされていた。この、〈産む〉という行為を当然のこととして課するのが母性という制度である。〈産む〉ことを成し遂げ、確固たる地位を獲得したはずであった母の例を、カステリャノスはある短編に描いている。

5. メキシコ人にとっての母と「母の日」

メキシコは元来、母=息子をはじめとした家族の結びつきが強力な国柄であるとよく言われる。偉大な母の理想は、褐色の肌のマリア像である「グアダルーペの聖母」¹¹という崇拝の対象を生み出した。崇拝の対象となるはずであった〈母〉が、実はそうならなかった例が、「白髪の老母」“Cabecita blanca”の主人公フステーナである。この短編は、最後の短編集『家族のアルバム』*Álbum de familia* (1971) に収められている。そこでは、夫を亡くしたあとも成人した子供たちに尽くす偉大な母、典型的なメキシコの母親像が、皮肉たっぷりに描かれる。フステーナの夫は生前、浮気ばかりし、3人の子どもたちはそれぞれ成人してはいるものの、誰一人〈結婚〉していない。上の娘はアル中で、二番目は売春婦まがいに身を落とし、唯一の息子は同性愛者という設定である。フステーナは、自らの存在すべてをかけて〈家族〉に献身してきたものの、孫に囲まれるわけでもなく今や一人ぼっちで年寄り、病気と闘っている。だが、〈母〉自身は、自らの置かれた状況を認識できず、昔を懐かしむひまもないほどに、3人の子どもたちにいまだに振り回される日常が描かれる。ここでは、かつて神聖視されてきた〈家族〉や、〈母〉というものが虚像であるということが暴露される。賛美されるはずの〈母〉の像が疑問に付され、揶揄の対象となっているのである。

先述したとおり、没する前年に実施されたインタビューでカステリャノスは、自身の母親からないがしろにされていた孤独な幼少時代について語ったがその際、出版されたばかりの『家族のアルバム』について尋ねられ、母性という神話に塗り固められた女性の状況について次のように語った。

私たちの周りで見聞きされるすべての神話というものは、つまり母性という神話ですが、これは、「白髪の老母」に見て取れるように醜悪なものです。夫婦間の貞節、自己犠牲、よりどころ、といったようなことですが。¹²

さらに、メキシコにおける母=息子の結びつきについては、「全般的に言って、メキシコ人男性が探し求めるのは母親」であると概括し、それゆえ「彼らは重症のエディプスコンプレックス」¹³であるとまで言い放ち、母=息子の異常な絆の強さを問題視する。一歳年少の弟が早世したのちは、跡取りの喪失を嘆き悲しむばかりの両親が揃って他界するまでの15年間、家のなかに明るい灯がともったためしは

なかったとカステリャノスは思い起こして語っているとおり、ここには、自ら経験したことからくる考え方が反映されている。<子どもの死>ではなく、<跡取りがない>ことを嘆く意味において、カステリャノスの母は典型的なメキシコの母であった。跡取りである息子を<産む>ことこそが自ら女であることの唯一の証明であったからである。このように、跡取りにこだわる母と、期待を背負う跡取り息子の結びつきは固い。

さて、制度としての母性を補完するものは、うつわとしての家族である。メキシコでは、革命後の近代国家設立時、大統領を<父>と仰ぎ、その父の子としての構成要員たる家族を成すことが求められたことは拙稿ですでに指摘した¹⁴。その時代の前夜が、『真夜中の祈り』が背景としている1930年代、ラサロ・カルデナス大統領統治下のころである。

先述したカステリャノスの最後の短編集『家族のアルバム』は、そのタイトルにみじくも<家族>という単語を冠している。母とは、子どもからの尊敬を一身に集める<家族>のなかの核であった。しかし、家族の構成員の中心としての<母>は虚像であるとして、カステリャノスは非難の対象とすべく試みた。つまり、家族を成すことが国家政策として課された時代、女の役割は母になることだけではないはずだ、という問いかけを立てたのである。

『家族のアルバム』には三編の短編と、一つの中編小説が収められている。その冒頭短編「料理のレッスン」“Lección de cocina”は、新婚早々の妻が初めて自宅の台所で料理するときに、ステーキを焼くはずがうまくいかず、その肉を焼く短い時間の最中に、妻と夫に求められる役割について悶々と独りごちる筋立てである。物語の最初の部分で妻はこう宣言する。

わたしの居場所はここだ。人類の歴史が始まって以来、ずっとここだった。ドイツのことわざにもあるように、女はKüche, Kinder, Kircheと同意語である¹⁵。

「ここ」とはすなわち、台所である。Küche, Kinder, Kircheとは、ドイツ語でそれぞれ<台所、子ども、教会>という意味である。これは、ナチス・ドイツが自らの世界観を喧伝するために用いたスローガンの一部であり、ことわざ的に引用されることもある。女の居場所は家庭であり、戦士たる男に女は台所で奉仕し、アーリア人種の子どもの産むよう公言されたことはそれほど時代を遡ることではない。このスローガンに内在するのは、「男性への依存者、奉仕者、アーリア人種の再生産者という役割を女性にあてがう家父長制的権威という理想である」（ギティンス 1985=1990、p. 94）とダイアナ・ギティンス（Diana Gittins）は補足する。この三つの単語については、「女性の負担となり、社会進出や自己実現を阻むものとして理解されている」と石井香江は、ドイツの女性史を概観した論文「ドイツ女性史の近年の研究動向：ヴァイマル共和国期における身体の政治学」（石井 2007、p. 70）のなかで、現代ドイツにおいても今なお有効であると述べているものである。ナチス・ドイツにおいては、妊娠中絶が非合法化され、「社会にふさわしい者は多くの子を生むように勧められ、ふさわしくない者は断種された」（石井 2007、p. 94）。メキシコの1930年代を描こうとした際、第二次世界大戦前夜、同じ1930年代にドイツでこのような動きがあったことをカステリャノスは、自国の「状況」と重ねあわせていなかったとは考えにくい。この「ことわざ」への言及は、女性の居場所と存在価値を「台所」と「子ども」に限ったことに対する、明確な意図を持った最上級のパロディであると取れよう。

ダイアナ・ギティンスはその著書『家族をめぐる疑問』のなかで家族史を分析する際、フェミニズム

の問題意識を交差させることで、いわゆる家族神話を崩そうと試みた。人はなぜ結婚するのか、なぜ子どもを産むのか、家族とは本当に普遍的なものかといったことについて根本的な問いを立て、家族に関する新しい展望を与えようとした。ギティンスは、家族とは「決して自然で私的で平等主義に基づいた制度なのではなく、ジェンダー、年齢、階級に基づく権力関係を特徴とする現代産業社会の中心的な政治問題」（ギティンス 1985=1990, p. i）であると明言する。つまり家族という概念は、国家が必要に応じて作りだしかつ利用してきたものであり、家族内部の不平等な権力関係を助長し、女性を抑圧するものともなり得るというのである。メキシコにおいても、近代国家建設の文脈で政策的に想定された〈家族〉とは、「政治問題」以外の何ものでもなかった。そこにあつて女性の居場所は、台所と子どもを育てることと教会活動¹⁶のみにしか意義が認められなかったのである。

メキシコシティ中心部には、母性の象徴とも認められる「母親像のモニュメント」がまがまがしく設置されている（Davies p. 3）と、リサ・デイビーズ（Lisa Davies）はあらためて指摘する。男根に似せた塔の両側に、子を抱いた母親像が配されるそれは、まさしく「母の日」に設置された。メキシコにおいて「母の日」の行事化は、1922年から始まった。その年、初代公教育相ホセ・バスコンセロスに招かれたチリの詩人ガブリエラ・ミストラルがメキシコに到着する二か月前、『エクセルシオール』新聞は毎年5月10日を〈母の日〉として祝う提案を行ったからである。4月14日付社説においては、自己犠牲を払い多くの子どもを産み育てる母が称揚された¹⁷とある。これはそもそも、ユカタン州においてフェミニズム活動家たちの応援基盤を広く持ったカリーリョ＝プエルト（Carrillo Puerto）知事が、女性参政権、離婚法などとともに、米国人の産児制限活動家マーガレット・サンガー（Margaret Sangar）の避妊法を記載したパンフレットを配布し、産児制限運動を展開した結果に対する抗議の措置であった。「母の日」を祝う提案は、当時メキシコシティに多く存在した、サンガーのパンフレット配布に対する保守派の強い反発が招いた結果であり、その後、現在まで絶えることなく「母の日」の行事は続けられている。

1944年の「母の日」に「母親像のモニュメント」に最初の礎石を置いたのは、大統領アビラ・カマチョ（Manuel Ávila Camacho, 1940-1946在任）であり、最終的に現在の形になって正式にメキシコ市民向けに展示された1949年、ミゲル・アレマン（Miguel Alemán, 1946-1952在任）大統領はやはり「母の日」にオープニングイベントを行った。『真夜中の祈り』は、1934年から1940年までのラサロ・カルデナス統治下に起こったことであると時代設定がなされているが、そのカルデナス大統領に続く二代の大統領、すなわち「母親像のモニュメント」を設置したカマチョ、アレマン両大統領のまさにその統治期において、国民一人ひとりが家族をつくるべく政策的に奨励され（Brandenburg 1964, p. 4）、その政策の一環として母を讃える像が設置されたといえよう。こうしたなか、〈母性〉が国家政策へと実際に回収される様子についてカステリャノスが、自己の作品中にどのように描きこもうと試みたかについて見てみよう。

6. 「出産機械」になれなかった女

カステリャノスは、メキシコ女性の歴史についてのエッセイ『信仰の宣言』*Declaración de fé* (1996)を書き残している。没後20年を経て出版されたそのエッセイは、(1)先住民世界の女性、(2)植民地期の女性、(3)独立期の女性、(4)現代の女性、の四部構成を取り、先住民社会における出産についても

詳しく記述される。植民地時代の初期に新大陸に渡り、60年以上も現地で改宗活動を行ったフランシスコ会士、ベルナルディーノ・デ・サアグン (Bernardino de Sahagún) の著書¹⁸や、『ポポル・ブフ』*Popol Vuh*¹⁹といったマヤに伝わる人間起源の神話から多く引用し、先住民世界の女の一生と日常生活が再構成されている。カステリャノスによると、定住生活がはじまったところから、男によって男のための新しい秩序がつくられていった結果、女の社会への貢献度は、身体(肉体)を提供することに収斂していったとされている。

多産こそが価値あることとみなされた。母になることは女の本質的な役割であり、すべてを犠牲にすべきであるとされた。不妊は常に咎とされ(不妊の女は、悪魔と契約し、部族の神々を裏切る存在であると考えられていた)、恥の種であり、離婚の原因となった²⁰。

それゆえ、「肉体を提供すること以外には、女性の存在の正当性はなかった」(Castellanos 1996, p. 24)と明言する。しかしながらこの命題は、現代社会に生きるわれわれにも十分<通用>するものであり、古代メキシコに限ったことではないことは、クラウディア・フォン・ヴェールホフ (Claudia von Werlhof) が資本主義世界システムにおける女の身体について考察したことからも明らかである。

ヴェールホフは、女は新しい人間の生を創り出す能力を「独占」していたため、出産能力というものが資本主義社会の管理体制の中に取り込まれてしまったと観察した。女は、子宮という特殊な器官を占有するがゆえに、身体まるごと管理の対象とされたのである。女は、他の者が領有することを目的とした新しい生を産むための<生産手段>すなわち「出産機械」(ヴェールホフ 1990=1995, p. 65)というイメージに転化されたとまとめる。さらにヴェールホフは、女性と自然、女性と子ども、女性とその身体との調和というロマンチックなイメージは、「非常にしばしば芸術と文学の主題とされてきたが、このイメージは、この調和に対する暴力的で持続的な破壊の責任を隠蔽するために、男性が必要とする幻想以外のなにものでもない」(ヴェールホフ 1990=1995, p. 66)として、女が生き延びるための唯一残された手段は、将来の労働力を作り出す<出産>= \langle 生産 \rangle 手段のみであると述べた。

母性に関してまったく幻想など持たないことは、女自身の実感としてさまざまに証言されている。事実、出産という行為は医療が発達した現代にあっても、母体の生命を賭けて遂行されるものである。なおかつ、出産後の子を育てるということについてリッチは、「子供をもった女にかかる肉体的、精神的責任は、あらゆる社会的な負担のなかでもっとも重く、奴隷制度や肉体労働とも比べることはできない」と言い、「破壊的な感情にとらわれる」ことの可能性も示唆している。胎動を感じた時には、「私自身のからだに恐ろしい震えを起こしたように」思ったこともあり、「侵入者」(リッチ 1976=1990, p. 88)として見なすことすらあると正直に記述している。

『真夜中の祈り』において、白人農園主のレオナルドに強姦され身籠った先住民女性マルセラにとっては、暴力を受けたがゆえに胎児は「革命後のメキシコにとってはエイリアン」(Finnegan 2000, p. 86)のようにマルセラを苛む。マルセラは、胎動を感知してもなお「自身の特権に無知」(46)であり、お腹の子は一切興味を抱かない。産んだ後にいたってもマルセラは、赤ん坊の「縮れ毛を見てぞっとした」(49)とあり、それゆえに、大きなお腹のまま、カタリーナの家に取り取られていくのである。

子を孕み、子宮を提供している側からの不可思議な感覚についてカステリャノスは、胎児は「時間とともに、ますます容赦なくその内側で育っていき、最終的には破壊しつくす」(46)存在であると描写する。この生き物は、嫌悪を催す対象以外の何物でもなく、なおかつ宿し主を「うちのめす」(46)。子

を宿す側からの状況観察がなされており、必ずしもプラスの感情ばかりではないことを明確に指摘する。このように、妊娠や出産とは甘美な幻想を抱く対象などではなく、言い換えるなら、それらが〈賛美〉の対象となること自体に疑義を挟もうとする様子が見て取れる。子を産むことは神秘的でもなんでもないのであるとカステリャノスがことさらに強調することはすなわち、女を単なる〈出産機械〉として見なすことに疑義を呈することでもある。これは、没する直前に出版されたエッセイで、メキシコ人女性が、母になって〈産む〉ことばかりにこだわる点に対し、「単なる種の保存用の機械」(Castellanos 1973, p. 20) に自身を捧げる必要など毛頭ないといった指摘がなされていることから見て取る事ができる。

さてここで、カタリーナとドミンゴにおける、母=息子の結びつきの結末を見てみよう。マルセラが産み落とした子は、子のなかったカタリーナに引き取られ、ドミンゴと名付けられて手塩にかけて育てられた様子は、「カタリーナのスカートの中が大きくなった」(188) という描写からも判明する。しかしながらドミンゴは、最終的に養母であるカタリーナによって〈殺害〉される。蜂起した先住民たちの旗印とすべくわが子を、自らの一存で磔にし、結果的には〈殺害〉してしまうことについて、カステリャノスは「母性を過大評価」(Gil Iriarte 1999, p. 218) しているとして、マリア・ルイサ・ヒル・イリアルテ (María Luisa Gil Iriarte) はカタリーナの一連の行動を否定的に解釈する。また、リサ・デイビーズも、〈殺害〉の行為について、所有欲の強い世の中の他の母親たちと同様、カタリーナにとってドミンゴは単なる自身の延長にすぎないとして、カタリーナの〈歪んだ母性〉を非難する。十字架にかかるドミンゴは、真に「愛する息子ではなくむしろ、異質なものとして眺め」(Davies p. 17) しているとデイビーズは観察し、「私生児であり、同じ民族の少女の不名誉」(319) であった十字架の上の〈わが子〉を、「無感情のまま顧みることがなかった」(Davies p. 17) と一蹴した。カタリーナの母性のあり方を〈異質〉とみなし、その異質性を消滅(=磔で〈殺害〉する行為)させてしまうことで、母性神話をうまく打ち砕くことができたとしてその象徴的意味を強調する。だが果たして簡単にそう言いきってしまったよいいものだろうか。カタリーナは、ドミンゴの身体から真っ赤な血が噴き出した瞬間に分別を失う。気絶したドミンゴを、「苦悩に満ちた様子で観察していた」(322) といった描写もあることから、決して平然と眺めていたわけではなかったことがうかがえるからである。

大衆の面前で失神してからは術が使えなくなり、村人たちにとっての〈母〉としての地位が危うくなったカタリーナにとって、ドミンゴは唯一の「心の拠り所」(316) であった。しかしながらそのドミンゴも、10歳ともなれば大人の男社会への円滑な入場を見込んで、夫ペドロは頻繁にドミンゴを男の会合に連れ歩くようになる。民衆の〈母〉としてあるいはドミンゴの〈母〉としても存在することがかなわないと強い危機感を覚えたカタリーナは、自己喪失感におそわれる。〈殺害〉することで、せめて愛するわが子を永遠に自分だけの所有物とすることを欲望したとみることもできる。しかしながら、リッチのいう〈子を産む潜在能力〉のうちには、子を育てることも含まれる。カタリーナは、〈育てる〉だけでは欠如感は埋められず、あくまでも〈産む〉行為にこだわっていた。制度としての母性は、〈産む〉行為に重きを置くからである。十字架の上で果てる〈わが子〉を目の当たりにしたときカタリーナは初めて、〈産む〉ことだけにこだわっていた自身に気がついたのである。〈わが子〉が蘇って神となるといったような奇跡は起こらなかった。〈わが子〉を殺したという事実を悟ったカタリーナの心境は、「毘にかかった野獣」(345) のようであったと描写されている。カタリーナは、〈機械〉ではなく、子に対する慈しみの感情を持つ、正真正銘の〈母〉であった。こうしてカステリャノスは、制度として

の母性を徹底的に批判したのである。

7. <産まない>フリアの振る舞い

カステリャノスは『真夜中の祈り』のなかで、<産むこと>をあっさり拒否した女性像も描き込んでいる。農園主たちと先住民の間の仲介役として中央政府から派遣された役人フェルナンドの妻フリア・アセバドである。リッチは、「母親になることを拒む女は、たんに感情的に疑わしく見られるだけでなく、危険な存在でもある」（リッチ 1976=1990、p. 232）と言った。フリアは、チアパスの狭い地方社会にあって「危険な存在」として立ち位置を占める。法律による婚姻も子供を産むことのどちらをも、自らの強い意思で拒否したフリアは、「1960年代のメキシコのリベラルな女性を体現」し、「当時のトレンドを映す」（Finnegan 2000, p. 74）のものであるとヌアラ・フィネガン（Nuala Finnegan）は分析する。フリアはスペイン系の白人で、美しく魅惑的な女性として造形されている。利発でもあったため、大学生活を謳歌していた。大学の同窓であるフェルナンドが、フリアと一緒にいるべく生活費を稼ぐために地方で役人職を得たとき、フリアはむしろ喜んで赴任に付き添った。しかしながらフリアにとって、<夫>の二か所目の赴任先であるチアパスは、文化的刺激などまったくない退屈だけの土地であった。土地の女たちが社交の場所に集って話すテーマは、人の噂話とお金の話だけであったからだ。まっとうなことがらをテーマにして議論できる相手は、農園主で有力者の一人であるレオナルドのみであり、そのレオナルドと不倫の関係を結ぶのに時間はかからなかった。

フリアが、自身の学生時代を振り返り、独白する個所があり、そこではフラッシュバックの手法が採用されている。フェルナンドと机を並べていた大学のころは、男も女も関係なく議論を戦わせていた。そもそもフリアは、「子どもを持ちたいと思ったことはなかった」（138）。実際、身籠ったときがあったのだが、「中絶したのだった。それもわざと」²¹（139）。おそらくそれは同棲相手であったフェルナンドの子であったと考えられるが、作中には誰の子かという言及はない。子を始末したことは、本人以外を知るよしもない。ところが作者カステリャノスは、フリアにわざわざ、子を産みたくない女という印づけをした。女が子を産むことを課された時期、男と肩を並べて大学生活を謳歌した女は、<出産機械>になることを拒否した。カステリャノスは、時代に先駆けた女性像を造形することができなかつたと一部で批判されているが、こういった評は的を射ていない。作家は、産むことを拒んだフリアを通して、当時の女性の生き方としては珍しい新しいタイプの女性像を提案しようと試みたのである。特に理由もなく、「わざと」中絶したということをしりげなくほんの一言追加するだけで、<出産機械>ではない人間として、明確に自己主張する<新しい女>の存在の可能性を印象づけることにカステリャノスは成功しているといえよう。事実婚を敢行し、不倫をものともしない女、なおかつ<産むこと>をも拒否する女とは、結婚制度を脅かすのみならず、制度としての母性にとっても脅威の存在である。

しかしながら、フリアの結末はどうだろうか。カタリーナは、幼いころしょっちゅう遊びに行った洞窟でたまたま美しい石を見つけることができ、巫女としての力を取り戻した。つまり彼女なりの「避難場所」が存在したが、それに反し、両親の助言に反発して「同棲」をするために地方に出たフリアには、どこにも居場所はなかった。女たちの輪に加わることはなく、しかしながら新しい本を入手して知的好奇心を刺激するような機会も場所も、地方の田舎町には存在しなかったからだ。

不倫相手の農園主レオナルドに対しフリアは、常に堂々と的確な意見具申をした。ときには、中央政

府側の動きや、大土地所有制度の完全解体の命を受けて中央政府から派遣された自分の〈夫〉フェルナンドが、どのように農園主たちを懐柔しようとしているのかといったことなどについて、先回りして情報を横流しすることもあった。なぜなら、「フリアはフェルナンドの良さが理解できず、敬おうともしなかった」(179)からだ。それに対してフェルナンドは、「自分の連れ合いに対し、精一杯責任感を保とうと心がけていた」(180)。〈夫〉は、〈妻〉の不倫に気がついてはいたが、なるべく直視しないようにしていた。それは、自分自身が不甲斐なかったからである。というのも、二人の生活を支えるため職を得たとはいえ、勤務先がフリアの気に沿うような、洗練された都会のそれではなかったからである。共に赴任することを強制したかもしれないという負い目があったため、フリアに対しては「弱い存在、囚われの身となった野生の生き物に対する憐憫のような」(179)感情をいつも抱いていた。しかしリベラルさをいったん享受したことのある女は敏感に、そこに男の〈所有欲〉を感じ取り、単なる付属物になり下がった自らの状況に愛想をつかすこととなった。最終的に自ら下した決断は、一人でその地を去ることであった。不倫相手との何度かの言い争いののち、人間なら誰でもが〈移民〉するように自分も、と言いつつ自ら去っていくのであった。

こうして作者は、〈出産機械〉になることを拒否した新しいタイプの女として設定したフリアを、物語の舞台から下してしまう。フリアを通して、社会が定めた制度に囚われない、自由な考え方を備えた女性像を具現化することに成功するかに見せかけたその結末部分において、最終的に〈花道〉を与えなかったということはすなわち、彼女の生き方を否定したと考えるほうが妥当である。それではカタリーナの例はどうか。〈わが子〉を磔にしたところで、結局何も起こらなかったし、カタリーナは奇跡を起こすことなどできなかった。先住民たちの反乱は当局によって鎮圧され、〈わが子〉を失くしたという後悔に苛まれ、再び巫女としての力を取り戻すこともなかった。このようにカステリャノスは、カタリーナの磔も失敗させなおかつフリアの身の処し方も放棄するなど、八方塞がりの女の生き方を示し、否定的な結末——「夜明けにはまだまだ時間がかかっていた」(368)——を、物語の最終行に用意した。カタリーナは物語終盤、「放心状態で闇に消えた」(348)とある。産む／産まないにこだわらず、女が自由にふるまえる「夜明け」をまたずに、闇に消えるしかなかったのである。自身の内に母性を確認したカタリーナであったが、当時の社会は未だ、〈出産機械〉としての女が〈産む〉ことに重きを置いていたからである。

おわりに

ロサリオ・カステリャノスは、大学院修了直前に提出した修士論文においてもつばら男は、芸術作品を〈産む〉ことをしてきたが、それは、女には、子を〈産む〉という大作業があるからであったと分析したように、物書きとしての活動を開始するよりも以前から、〈産む〉ということについてこだわりを持っていた。そして、その論文の最終部分においては、女性は文筆活動をするのであれば、「独自のスタイルを持つべきである」という一文をすべりこませ、女が書くことについては、困難が伴うことに言及した。

カステリャノスが学童期を過ごした当時、メキシコではすべての国民が、近代国家の礎としての〈家族〉を成すことが求められ、すべての女性に〈産む〉義務が課された時代でもあった。それによって、産めない／産まない女性は疎まれる対象となり、社会で周縁化された。幼少時からの実母との葛藤につ

いて、繰り返しインタビューで語っていた作家カステリャノスは、その体験をベースにして、<女>は産む存在であるということについてこだわり、作品中に表わすことを試みた。カステリャノスは、二作目の長編小説『真夜中の祈り』において、堂々と、<産めない>女を主人公として中心に据えると同時に、自らの意思で<産まない>ことを決めた女についても描きこんだ。<出産機械>としての機能が女に求められた時代、<産まない>女であるフリアは社会的居場所を与えられることなく周縁化された。他方、<産めない>女、カタリーナを描くことを通してカステリャノスは、養子に対する慈しみの気持ちは、実子に対するそれとなんら変わらないものであり、産むことを経験しなかった女が、最終的に<母性>を持つに至ることが可能であることを証明したのであった。

付記

本稿は、2011年12月10日に明治大学において開催されたジェンダー史学会第8回大会での口頭発表に加筆・修正を加えたものである。本稿の執筆にあたり、貴重なご指摘とご助言をくださった会場の皆さま方に心よりお礼を申し上げます。

(すさき・けいこ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
比較社会文化学専攻博士後期課程在籍)
掲載決定日：2012（平成24）年12月13日

注

- 1 Carballo 1965, pp. 411-424.
- 2 チアバスの先住民の言葉で「九人の神々」の意味。
- 3 以下、文中丸かっこ内の数字は、Castellanos 1962のページを示す。拙訳。
- 4 1945年、ノーベル文学賞を受賞した。
- 5 引用は、Ahern 1988, p. 3.
- 6 引用は、カステリャノス 2002=1957, p. 277。
- 7 Gordon 2005, pp. 29-50.
- 8 引用は、Gordon 2005, p. 43.
- 9 *Revista Mexicana de Literatura* (1963, pp. 3-4) や、*Cuadernos de Bellas Artes* (1962, Diciembre, III, numero 12) など。
- 10 『真夜中の祈り』は、カタリーナを中心に物語の時間軸が進行するためカタリーナが主人公と目されており、この点について先行研究で意見の相違はない。白人農園主社会と先住民社会との対立、あるいは彼らを取り巻く女性たち、聖職者や地方役人とのやりとりについても描写が多い。
- 11 征服後まもなくメキシコに出現したといわれる伝説の褐色の肌の聖母。
- 12 引用は、Gordon 2005, p. 36. 拙訳。
- 13 Gordon 2005, p. 38.
- 14 革命期以降も続いていた大土地所有制度を完全に解体したラサロ・カルデナス大統領に続く二代の大統領、アビラ・カマチョ（1940～1946在）およびミゲル・アレマン（1946～1952在）の統治下にあつては、「大統領」を国家の「父」と仰いだ疑似家族制が謳われ、「大統領=父」の名のもとに「一家」が団結し近代的な新国家完成が急がれたとされる。Brandenburg, 1964, p. 4. および洲崎（2012）参照。
- 15 引用は、Castellanos 1971, p. 7. 拙訳。
- 16 革命後に施行された新憲法においては、政教分離が謳われた。植民地期から革命前の時代にかけて独身女性は、教会の清掃を行ったりすることで、教会活動にかかわることが多かった。

- 17 松久 2012, p. 185。以下、母の日の設置に関する経緯については、松久の分析による。
- 18 文中、正確な参照先は明記されていない。
- 19 スペインによる征服後、先住民が記述したものを、フランシスコ・ヒメーネスがスペイン語に翻訳、写記したものを。
- 20 引用は、Castellanos 1996, p. 24. 拙訳。
- 21 筆者は「中絶」と訳したが、スペイン語においては中絶と流産は同じ一つの単語abortoが使用されるため、「わざと」という副詞を作者は置いたのである。

参考文献

- 石井香江「ドイツ女性史の近年の研究動向——ヴァイマル共和国期における身体の政治学」、『一橋研究』第25巻第2号（2000）：pp. 49-71.
- 清水透『エル・チチヨンの怒り メキシコにおける近代とアイデンティティ』東京大学出版会、1988年。
- 洲崎圭子「ロサリオ・カステジャノスの思想形成——初期の作品を中心として」立教大学ラテンアメリカ研究所『立教大学ラテンアメリカ研究所報』第36号（2008）：pp. 1-18。
- 「『独身女性』の表象：ロサリオ・カステリャノスの『バルン・カナン』を中心に」お茶の水女子大学英文学会 *Journal of the Ochanomizu University English Society* 第2号（2012）：pp. 31-42.
- 高林則明「文学のなかのインディオの家族像——ロサリオ・カステリャノスにみる女性と家族」三田千代子・奥山恭子編『ラテンアメリカ家族と社会』新評論、1992年。
- 高林則明「『闇の祈祷』にみる<歪められた母性>と<孤独>——カタリーナ・ディアス・プイルハーの行動原理」京都外国語大学イスパニア語学科『イスパニア語学科創設三十周年記念論文集』（1995）：pp. 97-106.
- 田中敬一「ロサリオ・カステリャノスの小説（Ⅲ）——二つの世界が交わる時、『真夜中の祈り』」愛知県立大学外国語学部『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』第25号（1993）：pp. 241-259.
- 松久玲子『メキシコ近代公教育におけるジェンダー・ポリティクス』行路社、2012年。
- 松久玲子編『メキシコの女たちの声 メキシコ・フェミニズム運動資料集』行路社、2002年。
- Ahern, Maureen. ed. *A Rosario Castellanos Reader: An Anthology of Her Poetry, Short Fiction, Essays, and Drama*. Austin: University of Texas Press, 1988.
- Bonifaz, Oscar. *Rosario: una lámpara llamada*. 1984. México: Congreso del Estado de Chiapas, 2nd ed. 2000.
- Brandenburg, Frank. *The Making of Modern Mexico*, Englewood Cliffs, N. J: Prentice-Hall, 1964.
- Carballo, Emmanuel. *Diecinueve protagonistas de la literatura mexicana del siglo XX*. México: Empresas Editoriales, 1965.
- Castellanos, Rosario. *Sobre cultura femenina*, México: Fondo de Cultura Económica, [1950] 2005.
- . *Balún-Canán*. México: Fondo de Cultura Económica, 1957. 2nd ed., 1961（ロサリオ・カステリャノス『バルン・カナン 九人の神々の住む処』田中敬一訳、行路社、2002年）。
- . *Oficio de tinieblas*. México: Joaquín Mortiz, 1962.
- . "Lección de cocina", *Álbum de familia*, México: Joaquín Mortiz, 1971（ロサリオ・カステリャノス「料理のレッスン」山藤昭子訳、松久玲子編『メキシコの女たちの声 メキシコ・フェミニズム運動資料集』行路社、2002年）。
- . *Mujer que sabe latín*. México: Secretaría de Educación Pública, 1973.
- . *Declaración de fe*. México: Alfaguara, 1996.
- Davies, Lisa. "Monstrous mothers and a the cult of the Virgin in Rosario Castellanos' *Oficio de tinieblas*", <http://ojs.cf.ac.uk/index.php/newreadings/article/download/30/25>（2012年9月13日閲覧）。
- Espejo, Beatriz. "Entrevista con Rosario Castellanos", In Maria del Refugio Llamas ed. *A Rosario Castellanos: sus amigos / Recopilación de textos y selección poética...*, Juventud, 1975.
- Finnegan, Nuala. *Monstrous Projections of Femininity in the fiction of Mexican Writer Rosario Castellanos*, New York: The Edwin Mellen Press, 2000.
- Franco, Jean. *Plotting Woman*. New York: Columbia University Press. 1989.
- Gil Iriarte, María Luisa. *Testamento de Hecuba*. España: Universidad de Sevilla. 1999.

- Gittins, Diana. *The family in question*. New York: MacMillan. 1985 (ダイアナ・ギティンス『家族をめぐる疑問』金井淑子・石川玲子訳、新曜社、1990年)。
- Gordon, Samuel. *Palabras sin límites*, México: Universidad Autónoma de la Ciudad de México, 2005.
- Guerra, Lucía. “El lenguaje como instrumento de dominio y recurso deconstructivo de la historia en *Oficio de tinieblas*”, In Aralia López González ed. *Sin imágenes falsas, sin falsos espejos*. México: El Colegio de México. 1995.
- Karic, Pol Popovic and Fidel Chávez Pérez. eds. *Rosario Castellanos: perspectivas críticas*. México: Tecnológico de Monterrey. Porrúa. 2010.
- Miller, Martha LaFollette. “The ambivalence of power: self-disparagement in the newspaper editorials of Rosario Castellanos”. In Doris Meyer ed. *Reinterpreting the Spanish American Essay*. Austin: University of Texas Press, 1995.
- Mistral, Gabriela. *Lecturas para mujeres*. México: Porrúa, [1967] 2005.
- O’Connell, Joanna. *Prospero’s Daughter: the prose of Rosario Castellanos*. Austin: University of Texas Press, 1995.
- Recinos, Adrián. *El Popol Vuh: Las antiguas historias del Quiché*. México: Fondo de Cultura Económica. 1947 (A. レシーノス原訳『マヤ神話 ポボル・ブフ』林屋永吉訳、中央公論新社、2001年)。
- Rich, Adrienne. *Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution*. W.W.Norton & Company, 1976 (アドリエンス・リッチ『女から生まれる』高橋芽香子訳、晶文社、1990年)。
- Sommers, Joseph. “El ciclo de Chiapas: nueva corriente literaria”, *Cuadernos Americanos* 2 Vol. 133, 1964, pp. 246-261.
- Von Werlhof, Claudia. “Warum Bauern und Hausfrauen im Kapitalistischen Weltsystem nicht Verschwinden”, *Man.*, 1990 (C.V.ヴェールホフ「農民と主婦が資本主義世界システムの中で消滅しないのはなぜか」、マリア・ミース、C.V.ヴェールホフ、V.B.=トムゼン共著『世界システムと女性』古田睦美・善本裕子訳、藤原書店、1995年)。